武田信照

『価値形態と貨幣』

梓出版社　1982.11　12＋384ページ

価値実体論は労働価値論の起点をなし，それに続く価値形態論は価値実体論の正当性を回帰的に検証する位置に立つ。けだし，商品に対象化された抽象的人間労働が労働時間で表示できず別の商品の使用価値という正反対物で現象するメカニズムを論証して初めて，価値実体を抽象的人間労働に求めた価値実体論は強固な説得力をもつからである。その意味で，価値実体論と価値形態論とは概念上相即不離の関係にある。戦前には殆ど空白であった価値形態論は，久留間氏の所説によってその水準が一挙に引き上げられた。しかし，久留間氏の著作を画期的力作と認めることは氏が価値表現の固有なメカニズムの論証に成功したことを意味しない。ここに，宇野・久留間論争を研究史上の第1段階とすれば，その後第2段階をむかえるべき必然性があった。本書は戦後不動の地位にあった久留間説の包括的再検討を通じて価値形態論に一石を投じることを意図した意欲作である。因みに，研究史上の第二段階を画する論争の火つけ役を演じたのは本書の著者である。われわれが本書を評価する際の尺度は，本質としての対象化された抽象的人間労働とその現象形態としての使用価値との間に介在すべき理論的橋渡しの正否にある。しかし，われわれの立場からすれば，本書に疑問を禁じえない。

先ず最初に，著者は，価値表現のメカニズムを考察する根本前提として等価形態に立つ商品は交換関係にある必要がないだけでなく欲望対象である必要もないことを強調される。「交換関係と価値表現関係とはつねに一個二重の関係をなしていない」(p. 213)。「等価商品の選択に欲望は直接関係をもたない」(p. 317)。著者の主張は，「等価形態にある商品は……単に表象されたものとしてあるにすぎない」(『価値形態論と交換過程論』p. 99)という久留間氏の一方の主張を受けいれた上で「上衣が等価形態に置かれるのはリンネル所有者の欲望の対象であるからである」(同上，p. 71)という他方の主張を否定して従来の支配的見解を首尾一貫させたものである。著者の主張の基本的根拠は等価商品が価値表現上欲望対象としての本来的使用価値としては機能しないという点にあるが，『資本論』の立場からいえば，等価商品が観念的存在でよく欲望対象である必要がないという著者の主張は根本的に成立しない。第1に，価値実体論が示す通り，抽象的人間労働を唯一の構成要素とする価値は諸商品が交換関係に立つ市場でのみ成立するにすぎず，価値が概念上成立しない場合にはその必然的現象形態である価値形態もまた成立する余地がないからである。ここでは価値概念抜きに価値形態を論じたのは宇野氏であったことが想起されてよい。もし価値が生産過程ですでに成立するというならば，それは概念上リカード理論への転落を意味する。第2に，価値表現上上衣が本来の使用価値として機能しないことは，等価商品たる上衣がリンネルと交換関係にないことを全然意味しない。けだし，2商品はそれぞれ欲望対象として交換関係にはいるが，2商品の等置関係そのものは織布労働と裁縫労働とがともに抽象的人間労働として相等しいことによってのみ成り立ちそれぞれがもつ使用価値の有用性には関係がないからである。価値のみならず価値形態もまた交換関係に固有に帰属することに関しては次の一文に明らかである。「ある1つの商品の単純な価値形態は，異種の1商品に対するその商品の価値関係のうちに，すなわち異種の1商品との交換関係のうちに，含まれている」(KI, S. 74)。価値形態論では等価商品が観念的存在で済むならば，価値実体論では何故に等価商品が観念的存在であってはならないのかについての積極的説明が必要である。

更に，著者は，等価商品が観念的存在であってよいという主張を根本的基礎に据えて，価値が如何にしてその正反対物である使用価値で表現されるのかという価値形態論の核心に進む。著者によれば，価値形態の秘密はリンネルが初めから一方的に上衣を価値物としてみずからに等置する点にある。「リンネルは上衣を自分に等しいものとして，したがって価値として自分に等置することによって，その価値を表現する」(p. 143)。ここには価値表現に論理的に区別される2つの段階を認める久留間説への正当な批判論点がある(p. 180)。けだし，価値表現とは他方の商品の使用価値が一方の商品の価値の現象形態に転化することに尽きるからである。しかし，著者の主張それ自体は対象化された抽象的人間労働が如何なる内在的メカニズムを通じてその正反対物である使用価値で現象するかの論証に成功していない。第1に，著者は，「価値関係」(p. 179)の中でリンネルが初めから一方的に上衣を価値物として等置するというが，著者のいう「価値関係」とは一体何か。著者の場合，上衣はリンネルにとって観念的存在でしかなく，両者の間には何の客観的関係もないからである。また，「価値関係」の不分

明さはリンネルと上衣がともに価値物として等置されるのではないという間違った主張と一体の関係にある。われわれの見解によれば，凝固した抽象的人間労働として等置される価値関係の中では，対等平等な立場にあるリンネルと上衣とはともに価値物として存在する。つまり，市場での価値関係の中で，有用物と価値物という二重性格をもつそれぞれの商品はともに一面的に価値物として相対し合う。従って，リンネルにとって上衣の使用価値が貨幣の即自態とみなされるのは，上衣が一方的に価値物として等置されるからではなく，価値関係それ自体の中ではリンネルも上衣もともにその現物形態のままで凝固した抽象的人間労働として同等であることに起因する。これは，天秤の上で棒砂糖と鉄片とがその現物形態のままで重さとしては同等であるがゆえに，鉄片が棒砂糖の重さの現象形態になるのと同じ原理である。価値関係の中では一方のリンネルにとって成り立つことは立場をかえれば他方の上衣にとっても成り立つ。総じていえば，リンネルにとって上衣が観念的存在でしかないのに価値物として等置されるというのはリンネル所有者の観念の中でしかないように思われる。第2に，百歩譲って著者の主張を認めたとしてもそれは価値形態の秘密の説明になっていない。けだし，リンネルが上衣を価値物として等置するという場合肝腎要の論点は上衣の使用価値が如何にしてリンネルに対象化された抽象的人間労働の現象形態になるのかという一点にあるが，著者の説明では他方の使用価値という自然的定在が一方の抽象的人間労働という社会的定在と同等な定在に転化する内在的媒介項が不明であるからである。マルクスの教える所に従えば，一方の抽象的人間労働と他方の使用価値という2つの異質な定在を同等化せしめる内在的媒介項は，等置された織布労働と裁縫労働との関係の中で後者が前者に内在する抽象的人間労働の実現形態に転じる固有な関係にある。つまり，織布労働と裁縫労働との等置関係の中で両者がともにその現物形態のままで抽象的人間労働として同等な資格をもつことによって前者にとっては後者がその抽象的人間労働の実現形態に転じる内在的関係を媒介にして初めて，上衣の使用価値という自然的定在がリンネルに対象化された抽象的人間労働という社会的定在を代表するという摩訶不思議な関係が成立するのである(拙稿「価値概念と価値形態」『高知論叢』第8号)。確かに本書には価値表現の固有なメカニズムを論証した「相対的価値形態の内実」第5文節の説明があるが，それは単に第3文節の「いいなおし」(p. 182)としてにすぎない。第3文節と第5文節とがともに価値表現のメカニズムを論証したという解釈は文字通り久留間説と軌を一にする。それは「価値実体とはさしあたり無関係に価値のレベルで価値表現のいかにしてを解明している第3パラグラフ」(p. 184)という文言に明らかである。しかし，第3文節は通常の解釈のように凝固した抽象的人間労働が如何にしてその正反対物たる使用価値で現象するかを謎解きした箇所ではない。第3文節の課題は価値等式の中では右辺の上衣の使用価値が左辺のリンネルにとってリンネル価値を表わす貨幣の即自態として存在するという単なる事実の確認にある。それは同じ第3文節の中での自然科学上の例示が何よりも端的に示す通りである。そもそも価値形態の謎は凝固した抽象的人間労働が使用価値をその現象形態とする取り違えの発生にあるのに，「価値実体とは……無関係に……価値表現のいかにしてを解明」するとはどういうことか。ここでは，価値表現のメカニズムの論証以前に価値形態の謎とは何かという本源的問題の明確化の必要がある。また，「価値実体とは無関係に」価値表現のメカニズムの論証が可能ならば，宇野説批判の決め手を欠くことになる。

最後に，著者の最も新味のある主張は，価値形態論では価値尺度としての貨幣の形成が論じられ交換過程論では流通手段としての貨幣の形成が論じられるという見解である。著者は，久留間氏の周知の「何によって・何故・如何にして」のシェーマを衝き崩すために，貨幣の「何によって」は価値形態論にも交換過程論にも属するとして前者と後者ではそれぞれ価値尺度としての貨幣と流通手段としての貨幣とが別々に論証されることを力説される。しかし，著者の新説には久留間説批判の行き過ぎがある。久留間説の最大の功績の1つは一般的等価形態が金に合生する所以の論証が交換過程論の固有な課題に属することを看破されたことにあると思われるからである。先ず第1に，価値尺度としての貨幣が先行的に形成される根拠として著者があげる西アフリカのバールなどの具体例は，貨幣形態への移行の証明までが価値形態論の課題に属することを意味しない。というのも，貨幣形態の成立とは一義的に一般的等価形態の金への癒着を意味するからである。西アフリカのバールの事例は一般的価値形態の次元上で歴史上あれやこれやの使用価値が一般的等価形態の位置を占めたことの具体例でしかない。第2に，著者は自説の理論的根拠として「価値概念とその定在との矛盾」(p. 351)こそ貨幣形態形成の原動力だと主張されるが，著者の主張に従えば，どの商品も直接的に一般的等価形態に立ちえないのに或る特定の一商品が一般的等価形態に立たねばならないという諸商品の全

面的交換に内在する矛盾は理論上消滅してしまうことになる。つまり，著者の場合価値形態論次元上で貨幣形態の成立まで一挙に論証できるとすれば，交換過程論は概念上不要となる。また，一般的等価形態が金に合生して生成した著者のいう価値尺度としての貨幣は何故にそのままで流通手段として機能しえないのかという素朴な疑問に対して説得力ある説明が必要であろう。総じて，著者の新説はそれを裏付ける論証が必ずしも十分でないように思われる。

以上，われわれは，『資本論』に内在して本書に対して忌憚なく純理論的な検討を加えた。それは，本書が価値形態論研究史の第2段階の代表文献であると同時に価値形態論の根本的基礎をなす価値実体論の曖昧さという従来の所説と共通な欠陥をもつために依然として価値形態の秘密が未解決であるという2つの理由による。『資本論』との間に残された距離は依然として大きいというのがわれわれの本書に対する総括的結論である。

〔頭川　博〕

[redacted]

[redacted]